

國姓

四十五天二

人

三十三人

節取數

八十四

國姓村

里長 松平

開張、後宮、正字、國姓、城、中、寺、山、寺、

清濁、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、寺、

國姓村

関根村

関根村

里長 松四郎

関根ハ仮字ナリ正字ハ堰根堰埭の事ナリセキト云々之
清濁ハ方言ナリ去リテ事あるナリ郡邑記ハ関根村民家二

軒今一戸あり久保野目村ハ十四軒今五戸明永野村同書延寶七未

年横手給士常生社之助忠進村民家四軒と見ゆ今家二戸あり

大島居山村民家三軒昔中嶽山ノ鳥居有之舊跡傳ニと同書ノ

あり今冬大島居山村あり明永野同書ノ開古来ヨリ横手給人百三

十人餘手作畑起立巾利紙結ビ先年追廻し見入野下川原忠進

開ニ仕混乱仕當時有高難相分訴云々ト見え多ク今冬此村の

枝郷久保野目村明永野村之明永ハ人の名ナリト云々聞

え多ク

久保野目村

久保目村

熊野社向南 祭日九月九日 齋主久太郎

白山姫社向南 祭日八月十日 齋主市太郎

孤崎大明神社向南 祭日九月十日 齋主長兵衛

所蔵神社向南 祭日六月十日 齋主源四郎

明永野村

稻荷森大明神社向南 祭日八月十日 齋主郷中

大鳥居山今の家

小吉山大明神社向南 祭日九月十日 齋主郷中

總家負廿七戸 人数百九人 馬負七足

一打田ノ字処

千手澤 横手の内城の東 田島なるあり 明永澤 関根 平城 真山

大鳥山上下 吉澤 川端 小中嶋

久保田村

龜田江崎向南 公曆九月九日

龜田久太郎

白土江崎向南 公曆九月九日

白土久太郎

龜田江崎向南 公曆九月九日

龜田久太郎

白土江崎向南 公曆九月九日

白土久太郎

龜田江崎向南 公曆九月九日

龜田久太郎

白土江崎向南 公曆九月九日

白土久太郎

龜田江崎向南 公曆九月九日

龜田久太郎

大島山本村 公曆九月九日

大島山本村

千手山 公曆九月九日

千手山

信濃山 公曆九月九日

信濃山

三原新田邑

里長 長左衛門

三原新田邑 公曆九月九日

境村 公曆九月九日

境村 公曆九月九日

境村 公曆九月九日

境村 公曆九月九日

平城村民家 公曆九月九日

七面山神 公曆九月九日

三原新田邑 公曆九月九日

三原新田邑 公曆九月九日

三原新田邑

里長

長左衛門

三原新田また三原とのより東、杉澤西、杉目南、堰根北、上
境村、郡邑記、三原村民家土軒延寶元年丑年、関根村、杉目村、上
境村土地横手給人吉澤宗四郎開出、穴仙北郡金澤西根村、
野形柳村入合三原村川端、野、境と見え、中川村家負
四軒

平城村民家一軒此村退轉家あり

堰根村六戸

七面明神

祭日六月十九日

齋主 興市二

総家負廿二戸

人負百十二人

馬負十二疋

縣志卷之三

人頁百十二

里頁十二

縣志卷之三

卷之六

縣志卷之三

縣志卷之三

卷之六

縣志卷之三

四

縣志卷之三

縣志卷之三

縣志卷之三

縣志卷之三

三

里

里

明永野邑

里

里

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

明永野邑

里長 六左衛門

明永野村ハ横手一里北に在リまゝ上六丁村ハ明永邑なり家三戸まゝ下六丁に明永邑あり家十戸明永邑と明永埜邑と其の地を遠く隔たり同名なりと大に異なりあることあるなり享保郡邑記に開地古来より横手給士百廿八畝手作地畑に起立市判紙に結し先年追追回し見入野下河原忠進開に仕し混雑仕り有高難相分訴云々と見えありまゝ関根根村ハ明永野邑あり同郡邑記に延寶七年横手給士菅生庄之助忠進開民家四軒今に見ゆ此明永の各三四ヶ処あり見えある

大瀧小瀧明永野より三里 板屋平と子処あり袖山袖山村外山外山村の邑近くにも板屋比良あり同名なりこと処に此大瀧小瀧岩山あり

見るべき処に

片方林足駄烏堂といふ所なり此は舊綱堂なり郷土に近
くあれは木履をきくそこは往來の義の名ことなり

長峯といふあり在右ハ田は鰻とりづとて其の長峯を長根や
つちを此處よりとりてあがきとよめるハといふなりげに

横手の明永野村家世三戸あり外は中林守と右内門の家戸あり
鐵銃の射場を踰えて鳴見澤熊野社は行山路あり

つ坂中出獄（登り坂）に

熊野社いづれか神祠平澤良助某の病室に氏神といふところあり廢
寺といふ真言宗松壽院を此處より起し建てるその地をいふ
といふ

熊野社

里長

見入野新田邑

見入野新田邑

里長

市郎兵衛

郡邑記延寶七年横手給士安士孫兵衛滑川又市忠進開地
民家三軒と見也見入子地名田畠の字は之を以て聞えり
こそそも田に實入良地を祝言云い初一名あるむ三河尾
張遠江をこの田地乃字も良田なるとて實取場といふこと
多しまた三河國ある名所は翠野地と云ありて古歌多し是も本
を實採田をこそを水元とて田佃より名ある好事の雅名を
なす実取を緑とてみえり此地と云い之の外山外浦を袖山袖浦
と作らる如く緑野の池を大池とてハ郎湖の赤鮎の形せし大新すの
りその池を俗に岩堀の池とて古柵の跡あり岩堀の城主某此後胤ハ
出羽の村田あり久保田家士岩堀宗六某を其家と云い傳ふ

狼澤村家系

此狼澤を同延寶七己未年より創り享保日記に民家三軒とあり
狼をおいぬともつづを省めていふ名に

七日市村

延寶九醉年此村創ぬ寅卯不作ニ立除と享保郡邑記に見
え多しそのいふ一以とく大やうある郷さく七日ふ市立一肆跡あり
此事華嚴院の成綱澤の記に見え多しまた此新田といふとまれ
かくはれ見入野といふ村に延寶九年のこ跡さく杉澤に在り民家
七軒ありし事享保日記にも見え多し

総家負十六戸良人理人負百二人 里長 馬立足 共備

杉澤邑

里長

儀右衛門

此村郡邑記に平鹿郡の創り多し由黒印右持田村に在り

高澤帳出と見ゆ南記に杉澤村に在り高澤と見ゆ故郷杉澤に在り

高澤帳出と見ゆ南記に杉澤村に在り高澤と見ゆ故郷杉澤に在り

高澤帳出と見ゆ南記に杉澤村に在り高澤と見ゆ故郷杉澤に在り

高澤帳出と見ゆ南記に杉澤村に在り高澤と見ゆ故郷杉澤に在り

高澤帳出と見ゆ南記に杉澤村に在り高澤と見ゆ故郷杉澤に在り

高澤帳出と見ゆ南記に杉澤村に在り高澤と見ゆ故郷杉澤に在り

上臺村略

杉澤邑

延時水本仙本郡金堂寺に在り

陣

杉澤邑

里長

儀右衛門

此村郡邑記は平鹿郡の創より出く而黒印百拾箇村内七土村
高連帳出と見ゆ同記杉澤村総名唱馬と見ゆ故郷弥勤村上
臺村館泉村谷地中村中杉澤村中嶋村吉澤村七ヶ村ニ

彌勤村家令

いふ蔵石山弥勤寺と云天台の寺なりつらやを傳ふ郡邑記
み云彌勤堂あり北ハ金澤前郷ト山境民家十六軒と見之なり

弥勤尊社

癸日九月十九日

齋主

作右衛門

上臺村家令

蔵石山と云あり先年崩地癸時水本仙本郡金澤中野村ヨリ
取処代ニ錢三貫文ト蔵石山ヲ遣ケル故仙北ノ山ニ猶令也馬右堀

上臺村北方に在りて三貫堰下北ハ仙北郡金澤中野村山境倉石澤限西ハ同郡金澤中野村山法華塚古街道限ハ民家ハ軒と見ゆ増田の真人山ハ近き鍋澤の古道ハ三貫堰ありゆふ其処は精ニ

館泉村家今

むりー館ありて泉某と子城主の居館とらまふとき真清水のありともゆふとてふと泉^紙ハところく在り中古ハ家ハ戸ほりとも

谷地中村家今

此邑名いづこも多し郡邑記ハ仙北郡往還街道限ハ民家十軒

市所野村

同名河邊郡に在り此平鹿郡杉澤の市所野中急よりありける處なり今ハ仙北郡に入る郡邑記ハ東北ハ仙北郡金澤中野村往還街道限西ハ同郡安本村田ニ境ハ地形ハ同郡安本村ニハ寛文四年茂木弥三郎横手給士上遠野監物小貫治右門畑野共ニ開高處杉澤村水田次第依り當村ハ土民七軒引移り田地府人ナレ右當高村ハ市黒印ハニ附れ仙北郡安本村土地ハ開邑境吟味上安本郡ニ可入云と見え多し此市所野村仙北郡安本^村の枝郷と成り享保日記ハ民家五戸と見え多し

中杉澤村家今

杉澤の中急ゆふの名ニ中村といふこと一享保日記ハ民家十二軒

とあり此邑の東は釋迦堂あり

誕生釋迦如來 祭日四月八日誕生會二

齋主 中嶋 典市

此釋迦堂の地は大杉一本あり古來杉澤を此杉むとより村名起る

中嶋村 今家
十三戸

むろーハ水湛るる地ありしより此名けりけりとか享保のむろーハ民
家志軒ありけりしより見えり

吉澤村 今家
五戸

吉澤を本々草のこ生ひ茂りしり地より段澤ありけりしと段て
ふ字を筆むろーけりし書き安うむととて書ぬ吉ハよき字乾
ひ

二番實入埜土面觀音 祭日四月十七日

齋主 祐十郎

いり地福長者西国三所の内紀国三井寺の觀世音を大師師定長
は作て六郡に安置のより處々あり教圖ありの歌

お澤の清水の流ぬや實入埜ふきろつばう松風れ音

杉澤河正淵觀音とむろーを唱て大なる淵ありつらきとを

辨財天を竹生嶋を草率して水邊におまへりてと兵火焼亡のと
祀せられ岳を飛たり給ふ其跡を長者の館跡の東の岳あり
水戸内實入野古谷池の下なりと古記あり見えり

見入野邑

郡邑記見入野村民家七軒延寶九年酉年開出と見え此村
今の別村とありて見入野新田とて輕輕の老良瀬邑の觀音も見
入山とつりまこと處も同名けりとおねえり

八山... 山の名どころ

一の澤 立森 ぬり澤 塘う澤 ぐけどまり

徳家負五ナ戸 人負三百ニナス 馬廿二足

辨天... 五... 散... 散...

杉目村 里長 三之丞

郡邑記... 杉目村... 里長...

杉目邑

石... 常陸... 杉目村... 杉目邑...

杉目村

里長

三之丞

郡邑記 杉目村民家十軒 荒屋敷村四軒今八戸あり エボ小屋
村二軒今も二戸あり 野中村十六軒今九戸あり 野中村北ハ仙北安本村
道ニテ境と見之なり

杉目氏あり義経蝦夷軍談上編九卷常陸坊海存遇義経と
いふくゝり係て義経々本宮より取り給ふ泉三郎陣を便と立ち
石給ふる常陸坊海存を日本より渡海し此處に着のよしを申す義
経忠衡大に悦び名馬兵糧を得るのよしをいふて存命を此地
に至る事我運明開くべき端と悦び急き對面ありて海存
義経忠衡に向て申けるハ某過りて文治五年閏四月君高館を落
給へ後館に残り留りて杉目行信増尾兼房をこと同トく寄手と

防ぎ戦うが終に行信兼房各自害しければ介錯し館より火を懸け
烟のまぎれに思ひ出津輕の方へ走し君を追行奉ると思ひ駒
形が山嶽を通りしと記老公羽は行達ひより云ふと見えありその移目
行信がゆゑよりある処や高館落城の時の人をさか思ひのされ
より其自害せしと聞えし増尾兼房も仙公羽とあり三ッ峯の森
に在りし事下境村にすまひに野中村野中も多き名に古き
名所も播磨国稻見野と云ふ処は清水あり野中の寒泉といふ
いふ所の中井に清水ぬききと云ふの心をうづめたるむ
此まのかうくさくのいふれあり能因歌枕もいりやあきまの諸
あが野中の名ありさかおもひ出まゐるぬ此移目邑に古き社
ともありゆゑよりつらねぬと尊き中社に云々か

神明宮 祭日八月廿日

齋主 一郷ノ保長ニ

大日如來社本野中ノ郷に座し此処より往くまると云ふ

祭日九月廿九日

齋主 興次兵衛

此邑総家負廿戸

人負凡百人

馬数八疋

横手前郷邑

里長

和三郎

此邑横手の鍛冶町より東南方へ所在郷差別あり軒を並べ人
家むろくと立續けし村は邑の東は本郷松原とて枝郷ありむじハ
ハ口村といふありて支郷三村といふ今々志々ば享保のころのころ
でもそこを民家二戸ありとて其跡を田畠の字に殘せりむろ一
はハ口野兵助といふ福者住しその後胤を泓大堤といふ村は今なほ
村の名は長けし略む堤の兵助と呼ぶ深が家よりむろし研墨思はる
五調足軼り事おど婦氣大堤村のくぐりて委曲は録り仙臺の府の
入口は苦竹口某口某口といふ八口といふところありそれはおどろ
横山といふ高き山山の方あり是は多し名おどろ此山あり
續紀天守寶字三年といふころは横川あり此事は横手の処にも具記

一これでもうこのも云む此横山の麓を櫻川さくらがわといふ川流るるは坡を
築構てそれをも横土手といひ省もて横手といふへう今もその古川れ
流の跡いぢあらし中頃横山將監某此処は居館すまみといひ

九山といふあり此處は前郷太郎左門尉某の墓誌石ありしが土に埋れし
りや見えまじつれの世れ人ともその名字を知らざりしをむ

ありと塚といふなりそは城見塚なる事だありといひて村の草創帳
とふものありけ塚をきくはそのいやく兵乱のとき稗米をよの多
く焼くをせり束堆といふ処ありともいふれどそのよりさうなむ
これを考ふる書記は精兵をあらけつものともあり倭訓集は物をあら
けといふ米ありぬなるに新撰字鏡は謂をあらけとあり米浴と註せり
あらと見えぬり強言あらむ精兵も龍城をあらけと初めいれり

此前郷は及川嶋森氏なりつれぬより家きくそのむりみちれく和
賀郡の人ありける永慶軍記三十五巻は録しける天正のころ島屋
崎の城を攻落し再び和賀を押領せしとも翌年九戸中誅戮のとき二
子城も攻落され父薩摩守義忠澤内も退く折る討死せりこれ因
て又次郎又四郎二人の子山北へ立越えて去年牢浪して在りしが舊好の者
及川嶋等を頼る月日を送りける明れり文禄元年太閤秀吉公
三韓を攻給ふと諸國の軍勢を召れ給ふに依り奥羽の大小
名黨も高家も残りなく召し進んで上る此時和賀又治郎金房
又四郎山北の松川の奥に忍ひける此を聞て能折うと思ひけれ
ば云々あつと見えぬる其及川嶋森統のま及川嶋新十郎左門前郷の
嶋森左衛門五代の里正妻此嶋森母方の姓なりあつと云ふ舊家あるなり

神明宮南園鎮座り 祭日七月廿日

祠官 高橋筑後正

上宮太子は貞享三年乙丑四月廿日ありて此神明社の傍におど枝のひは齋ひ奉るに祭日四月六日大祭に神官高橋筑後正に此祭禮の事、横手の處を委曲せしむるにこれよりいふに

愛宕護神社東の園に鎮座り此社をむく横手の守護神なりて朝倉山のむむぐに在りて本は横手佐渡守齋ひ奉るに社が今、前御よりやまをいへ奉りてさるをいへて横手の愛宕に山の名のいへ残りけりおとす祭にやまをいへて別當大寶院に

庚申社 正徳年中の社中改められも古き社ありて今、社記ありてありてあり 祭日四月廿日 別當山崎の常明院

天神社 文化元年庚申に社を齋る祭日六月廿日 別當並同

大明神社 ありてあり 稲荷社とありて稲荷大明社の棟札を書納めありて事あり此社は春日社、大明神なりて武雷命齋主命天津兎屋根命姫大神に此社の春日祭九月十六日齋主最上家浪人伊藤某その後伊藤勘右衛門とて家系譜等もありて火災ありていふ

白旗明神 日本武尊を齋るとも八幡明神を齋るともまゝ田村將軍を齋るともいふ其とありてある神靈といひて真跡さだめられず備前國の白旗の城あり是れ白幡神鎮座り素旆素幡をとも書り倭訓集に兼實公に記せる藏人行綱云く當家先祖より白綾魚紋の旗を用末せりと見えたり 新編纂圖に其家の祖貞訖親王が大將軍の宣言ありて月花門混白の幡を賜りしより事起まりと見えたりなり白幡の鼻祖を尊て齋るなり見えたりとありて事

か齋主ハ猿橋弥左衛門ニ猿橋の上祖小野寺家の物頭家ナリ永
慶軍記ハ和賀山北藤倉合戦のくさる猿橋弥ハと書るなり此
ミ左衛門彌左衛門が祖之上祖ナリ齋奉ハ御神ニと知るなり

尚書卿ハ白鹿ノ類ニ大ニ其ノ功ヲ著セリ
東宮ノ御母ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ
大膳卿ハ其ノ功ヲ著セリ

三升寺

黄檗派

旭岡山三升寺本山ハ山城国宇治黄檗山萬福寺中本寺ハ尾張国

乾山ノ先聖寺ニ寺ノ古記録不詳ナリ

開山潮音和尚元禄年中尾張の中本寺ナリ勸請セリ

二祖石門潮音ノ弟子ニ
享保年中遷化

三世密傳石門ノ弟子ニ
享保年中化

四世東洲密傳ノ弟子ニ
元文中化

五世慧念密傳ノ弟子ニ
延享年中化

六世北宗東洲ノ弟子ニ
寛延年中化

七世大器東洲ノ弟子ニ
寶曆年中化

八世瑞文大器ノ弟子ニ明和七年
文化十三年迄住職ナリ

九世現住正眼當住九世正眼ノ瑞文

ノ弟子ニ文化十四年三月入院セリ

虎を画く清人これを見て此虎の聲を捕むと欲眼色こころ手を拍てこか
うちをりつを耻て原本を清人からひ朝をこれにまわびてくはる日
人々とつて清人の官舎よりく帝画せし猛虎墨画ながら生るか如かり
こゝびる人々手を叩てめあふ譽言めくといひ其画を今横手町柏谷
善吉分水舎兄二
七十三歳家藏ニ

墨画虎 画者 甲寅季冬日於崇陽 唐人讚りたのこころ
唐館帝画堂善吉口

畫虎難肖虎千里

威風起其肖者誰

千秋藩分水子

王春波口口

福壽如意圖 枝折 桃菓二ツ 蝙蝠一羽 靈芝一朶

江府画工乙巳冬十月馬 松林山人口 分水カ師 柏屋善吉藏

横行左讀書一軸是江毛人分水が父善吉が高壽を祝めど
つきくれなむしといひ

其柏屋藏

かつ松原の二戸より出て分水が虎が名高き千里れ外まもはるぬ
ちき事 四拾歳のちあたびと京のちむと 甲州街鴻巣と
処少く死せりといひ

安田荒藏といふよりあるものなり 佐竹候のちむ優美かめ
給ひしが癩人となりて近づきつゝちむ事忌み奉れどあむ何とぞ
あむ奉りて今その末葉榮るを索見となりて此松原に住居る大
和國少なる盤若坂のむしりものかこころむしりりき

本郷村

世といふ多る名是を考ふといふ一榮え一処かぐり名の傳ふ処ありまゝ
後より創りしもの本郷のさうふありてまづ此が前郷かといふ処ありける
ハ太平記と書名ふれそが何より書ても前を手記といひまゝ前を手
記といふそれありて一まゝとあるハ太平記後太平記とも續太平記續太
平記とも書ぶるしものを此村も此いふまゝといふ所あると云ふといふなり

常德寺

西派 一向宗

大永山常德寺西本願寺の末流中本寺ハ仙北郡六郷の吉水山善證
寺ニ別基祐正寛永年中の草創といふ遷化の其月を不知正月
廿日を忌日として齋るニ二世常世 三世祐玄 四世常祐 五世
祐保 六世祐智 七世祐岸 八世祐了 九世祐丹 十世祐文

十一世祐海

天明六年
九月九日化

十二世祐勸

文化元年
三月廿日化

十三世現住職 淳代ニ

寶物

了如上人判の阿彌陀 一軸

古佛のあゝるもの 一幅 繪師誰といふ事を知らず

専性寺

西派 一向宗

古館山専性寺西本願寺の末流中本寺ハ六郷善證寺ニ寺
天正年中の草創といふ由田禄して寺の古記録傳ふがれハある
によりて 別祖真教 二世了國 三世了西 四世了正
五世善完 六世順完 七世完玄 八世教隨 九世義空
十世了伯 十一世義國 十二世義正 寶曆四年
十三世教海 永

白

寬政二年
二月二十日

天明八年

卷之六

卷五

金

大澤邑

卷六

大澤邑

家負古三軒

里長 三右衛門

大澤小澤の地名いとも多し蝦夷より大澤小澤と云此大澤は横手の
 東山内のかきあり枝郷あり沼山羽根山長匠矢横廻館庭當
 田あり並大澤村より郡邑記に往右ハ岩瀬市前化粧田由傳
 フ云と見ゆ倭訓栞にけをいへむ漢書少子湯沐ノ邑也俗にけ
 をひてむハ田の音に蓋田とも見えりとり岩瀬市前の事あり
 奥少云む郡邑記に加國山大明神社領五名正保四年ヨリ神主
 越前守に給テ神祭ホス云見えり
 猫石村の東に存りむハ猫の形せしなりつらむをとり今も其石
 せりせり猫石坂と云河の邊に在る坂の名も残るなりあり

大澤の東にあり沼山邑

家負

古三軒

大澤小澤の地名いとも多し
 蝦夷より大澤小澤と云此大澤は横手の
 東山内のかきあり枝郷あり沼山羽根山長匠矢横廻館庭當
 田あり並大澤村より郡邑記に往右ハ岩瀬市前化粧田由傳
 フ云と見ゆ倭訓栞にけをいへむ漢書少子湯沐ノ邑也俗にけ
 をひてむハ田の音に蓋田とも見えりとり岩瀬市前の事あり
 奥少云む郡邑記に加國山大明神社領五名正保四年ヨリ神主
 越前守に給テ神祭ホス云見えり
 猫石村の東に存りむハ猫の形せしなりつらむをとり今も其石
 せりせり猫石坂と云河の邊に在る坂の名も残るなりあり

羽根山の南あり此村享保郡邑記あり見えざるに近き新墾の地あり。外ありき川北邊の一村に

矢櫃邑

家負三戸

長沼の東山内四木村の北あり河向の邑に此村も郡邑記あり。新墾の村あり。山本の郡平山あり同名あり。杉前及部、奥者間、矢櫃といふ処に飛泉落山川あり。此大澤に矢櫃と古柵の跡あり。この世に誰が城主とも人々をえざる。古柵のありもて宋の如き村号を説く強言にや。びつやムベツの轉言する。搬夷諸あり。

廻館邑

廻館邑

家負古五軒
今二戸

旭岡の東麓あり。小森山の權宮あり。いかにいかに登山し。久し小森山の麓に龍の紋あり。七月十七日、神事あり。十二月十七日、齋夜の

夜籠りあり。いかに此峯に旭岡神社東あり。建てたりけり。朝日岳の名にけり。む。此地に旭岡山明壽院と。子妻帯の真言寺あり。其跡に今旭岡の神田あり。廻館も古柵の跡にあり。人々館をいふ。館といふ。館といふ。女淵 男淵 淵あり。いかに名あり。矢櫃あり。長沼邑より通ふ

庭當田邑

家負

古五軒
今五軒

庭當田といふあり。此名も雄勝郡杉宮に元當田といふ。庭當田といふ事を知る字も書きたり。出端を出る。子処といふ。郡邑記に延寶八年管生庄三助忠進開と見え。其管生田々神山の二玉門の東の方に在り。萱澤堂、澤落合の大池、二玉門の西池、萌て水上あり。いかに管生田も廢て今に留とあり。此にあり。旭岡の北麓に

神主鈴木永世の家あり

旭岡社 庭當田より二王門より二丁餘り仁王古佛を圓仁大師の作に
せし古物されば修理を加へり旭岡は七本杉とて靈木ありそと堀杉
中蔭齋杉 天狗杉 尉杉 中鮮除杉 笠杉 燈蓋杉二枝杉周
回三天餘尋神坂の西の下に生ひり中蔭齋杉人々神木と云ふ四二丈
六七尺神前神坂の南の方より生ひり 天狗杉は枝葉うちうりて逆杉のごと
く一回り二丈より多く本社の下の凹地に生ひり木の平なれば天狗と云ふ息
りと云ひまゝその杉の形生面翼飛遊空中か如ければそをもて天狗杉
と云ひてふむし 尉杉舊社地より生ひり其一回り二丈より多く中蔭齋杉尉杉の
生ひる近き所なり一回り二丈七八尺より古き枝串をけひ束ね納めをてそ
をのちより 笠杉を木末にと廣く枝葉細密なりてさうらう笠の

形せし木なればそを名ふよりその名や伏屋生ふる常木もさるもの
ありけむ一回り二丈より多く枝杉の近き所なり 燈蓋杉を周回二丈八尺一
丈七八尺より三岐より燈蓋の如手の如くそが中心より小桶の寄
生ありてふふ右桶水桶小桶をとりて品あり小桶を拵をとり此燈蓋
杉は龍燈くぐるとあり東より山掌より古宮地の跡あり西より當澤
流堀南より堂澤北より畠へ 本社獸向西旭岳大明神を参議從三
位征夷大將軍坂上大宿禰田村磨の草創にすし清原真人武則朝
臣此山に登りて天忍穗耳尊を齋奉てくさくこれ神寶を寄附神田を
奉り給ひしよりそを云ひ傳ふ出羽国六郡觀音順禮記舊本云々

十二番平鹿郡旭岡觀音堂正觀音立像中長一尺大伴師定朝作此處傳教
智證弘法慈覺大師等開基佛生靈地に

下居天照大神宮
清將軍の御像あり

神寶 白木弓一張矢一手
田村將軍納之

弓箭 藤原秀衡朝臣納之
太刀二腰 長門佐藤勝信納之

此御堂を清將軍武則公御建立其後小野寺氏代々造営修葺し終

つり 古館天狗館とも云ふ 名水あり 酒泉あり 二王門仁王

像々慈覺大師御作

教圖河内梨洲禮歌

朝日さす峰にわがけの松言にまゐる心をゆきかきりさう

ふと見えありその堂舎神殿も乱れありの祭ありの兵火てさる神あり

ふらりもやめ其世方とどろく真館^今の山は高き鎮座に神社も東

に向てまじりか旭の岡とくうもさひりも今もやういふ山やとあふて

山のありの座り
本社祭日四月十六日七月十六日すく二月を深夜より

正月二日まの齋食一御當家御藏^武運長久の祈禱あり 末社

大山祇社二王門上神段右脇に鎮座り祭日四月十二日 藥師^{ササ}奉

来社神段左脇に座り祭日四月八日雲慶^{クニ}作之 四天王像祭日作

並同 龍堂觀音行基僧正作之定朝作佛像焼亡せり祭日七

七月七日十二月十七日

旭岡大明神御縁起

夫尋物来由務本写憤者

貫通之靈神也天神而能達此道豈夫然乎嘗祭以言作社立者

曾人之庭訓也良有召我爰有磐石之高山因遇之斯山吁嗟

曰吾儕等祭神性聾拜社心盲吾靈神歟矣豈得達斯道乎

彼之實神神至為祭天照之為社八幡之尊威神記雜筆為往

来也至若高山曰旭岡神本曰觀音者靈新神清寔非龍身自
之所可託焉况彼之神以拜休以立管于天彞于海者乎請其祭之
而為子之千金贈言愚拜之曰夫山号與旭岡本地名與觀音勿
患性之愚魯唯思行而不拜爾且祭一拜昏運一步縱雖為謀
計眼前利潤終不蒙日月之憐功只在勉旃而已乃造神以祭之
目曰旭岡大明神也旭岡者昔大同二年田村九俊宗公之蒼創也夫
下繞萬里極雲天豈不在斯神乎故旭岡者則上下象天地而儀則
緣日四月十八日取九天九地之九矣寔該括四方交羅隅神風所及王
化所播聞而錄焉具而誌焉或問敷鳴之通往人祀和國之靈神或
入異域之事迹門執古詩之話櫺彼花實開落羽毛飛走靡不
採摭而祈焉然而斯書也或神各而体同或本地均緣日異至彼

驚峯亦无不質而改之是爾之燕石可謹祭之宮宇敬而退矣他
又未艱然曰自吾得神知天之為天譜土之為地和國祭神漢土
念仰者於言端水波同一体而知歸受筆授得神矣加旃亭去
偶北来鯉緘酬答富辭埃搜得便實如濁驥奔泉似蟄童
向陽今也神以可謹社以可立貫通之靈神哉矣千金之贈獲矣利
生如焉愚曰誠哉子之神以囊之幣不捐其金以書之拙不突
其義神体新而上達者神体其斯之謂與神主欽社拱手而出矣
緇素往來之貴賤信此社司而消二世之諸苦曾皆弘仁八稔嗣
逢困敦佳辰朱明林鐘下漸云と見えり此一卷をむく一りり
一りりハ虫のそとそとそれと知りかゝりしを武藏坊が紺紙の金
泥も草書も手納めりとり其辨慶の貞翰も文政四年辛

己三月十日火災亡ぬす、

韓織の曼荼羅一卷

吉廣ううちる

叙一ゆり 其か焼亡より 此神社は清原武則朝臣をほめ義
家將軍秀衡朝臣義家公世々將軍をかまうぞかしと給ひて
神寶も多く寄附給ひたりゆゑか灰燼ありぬすく横手の城主
小野寺代々この旭岡の神社は祈願ありてさちちるまかく神田又
たかりゆより寄附給ひると云ひ傳ふなり 佐竹家のゆ代とありてハ

源義隆朝臣

鑑照院公の
事を申奉る

正保丁四年

此中社参りし
を申奉る

明和六年

己丑三月廿日

中社

領高石を

寄附賜ふす、

源義敦朝臣

源通院公
を申奉る

明和六年

己丑三月廿日

中社

領高石を

参りし中社料として金百足中社納ありぬす、神主鈴木周
防正重更中社杯を給ひよしを傳ふ

旭岡神主鈴木采女介重俊家譜

其むろ、鈴木三郎重家平泉寺打死の後重家、末弟と見え行
方を見むとく、づも来れど来、かむぬあそむなり、都か歸り去
とせ、とき平鹿郡山川莊に至り旭岡山明壽院とて古き妻帯の真言
宗あり此寺女子のより寺の何と廢せむとせ、ときあれハ此重家が
末弟をせちか進めて智とせり志、て後年うちか鈴木おもふれハ
此神の内國あ生あがら僧侶とありて經典おうちむやぬくくちをさ
事ありむと朝名神のより身のうづき事をこいねくハ舞鶴
城主鶴庭小野寺某旭岡の神主ありき事をあげき給ふを聞けりさなり
あり事うちと此君の仰のまあり旭岡大明神の神主となりかくてふみの
子のいやく、家常えよりハ義徳のま、家屋焼亡てあま、の神財古
記録系圖等も餘波なく灰燼となりて六代ヤの間委曲あづきりけ

けきいまゝあり今代も常々 鈴木山城守重信を上祖とせり 二代惣太
 夫重一 三代越前守重政 四代市之正重吉 五代宮太丈重通
 六代宮田郎重清 七代越前守重政^次 八代周防守重英 九代大
 和正重直 十代大藏重兼 十一代常神官鈴木采女介重俊 男
 政枝重治二

旭岡ものがたり

酒の泉ありし天狗館の麓ありしやそあるの共天狗館より今子
 廻館とふ色き今子背山あり旭岡の旧社地の峯にみちれくの泉
 あり泉酒とふ地あり酒泉の跡に共ありしや正月の行事は家回り
 とふ事ありその辞は泉酒が湧やう去年酒の香ふらと唄ひこと歎き
 此年酒の涌やうとふまゝ伊勢国桑名近在九足八馬ありりり竹

の根より酒の泉が湧やうと人評れいりりこれをとめてし事ありす
 勝部雄醜骨山^{東島海}の麓の杉に根より文化年中酒涌出する事あり
 が東島海別當世の奇怪流布をむ事をはかりていつくひめく近隣
 の人もさうしとて南部のだむる長者すく春を瀧のものがたり
 といふかりたり 寶永のころなむ横手町免町の詰士奉法和術の
 達人旭岡の刻まありしけふあきりふあき子をひきすうて市坂をかり
 くら女ありさき身の毛いよちすぢ寒くあやとむあむふいと近
 づけに女むつむをむむむのそのあむてうちかてむあむむか
 いれに女のあやうとさうそのあむさういざあまち話めかゆめ黒
 川村の某や房きくさうあがら男ありもの石日まり瘡少てふむを
 ろそのもすはざり命あやかりし此市神を祈りて止てさうめ

そのころまでして志々七夜の時でありしてこよひてをさふぬを
志々七夜とよみかゝるしのとてさうしてさう給ふさぞあやとゆねを
一つむと別れきとあむ 貞享元禄の世にあむ角前川の治士金
子典兵衛と云ふ人ありこゝろ子のあむをうけて此旭岡のりて男
子と云ふありさうけぬあやさ事いそれ子産をうけて花の奉をさ
りてむらうづいふあむはものあむとあむとあむと此子七歳あり
あれは後祭いづらひさうてむとあむとあむとあむとあむとあむと
妻をさうて三人此中社にありとてゆき洗の寒泉を手にひて口
そぎ身もさうさうなりむとて此男重が手を此水にひてあむとあむと
さうかの握りあむと左の掌なりさうむらひてさう掌のあむ銭幣
形ありその銭形を見れ開元通寶の文字ありあむとあむとあむと

うれいさふ神の子産をさう授けさうさうてさう末家の常行むあむと
とありさうひさ家傳る吉国がうち一鈕刀を旭岡のはさ手祭奉
一が今焼かす残るあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと
ろ一旭岡山の額々北城文者といふ人の書に此山とさうてさう
りし人二名杉七本の外あり年経多櫻さうと山梨の木ありその
梨の木さうと木さう是山の神の秘とて正月十二日さうはさいせ
一後事とさうとあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと
くらさうその高き木に此旭岡の神事古十七日ありさうあむと
て今さうをさうとさうあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと
う

土面は 大澤邑に座りしと古きとてさう旭岡山明壽院、末

院あり久林山大澤寺と云ひ、此土面の創は天文十七年、秋
小野寺前侍従藤原景道朝臣再建ありて、貴賤うち群れ歩
をなこびり、事天文十七年九月十日土面社の別當鈴木重武の誌
社記に見えり古社舊刹の地と云傳へ諸れど其草創を云ひ
といひ考へる事あり、祭日正月十日祠官部重昌
五郎宮五郎宮を誤らうかある此
旧社やゆゑを云ふと云ふ所あり、古社地にあらむ、寺
ありとある所あり、岩瀬前此地に栖家て土面觀音
社のありと云ふ所ありて給ひしを老人の云ふ所あり

岩瀬御前事 あり輯録云、岩瀬御前の御實母、草名盛
重公の御室の御妹、須賀川岩瀬城主三階堂盛義公の御後室の
嫡子行親逝去の後、盛隆公の御次女を申請て御養女となされ、此御姫

君の御塔と云され、二階堂の家御相續と思召されり

天正十七年十月廿六日須賀川の城伊達政宗の爲め没落の節、後
室母子とも岩瀬城に引移り、其後佐竹のあり、常陸の御座あり、
此御姫の御長七年秋田の國替のみぎり、御二人とも秋田に越
のとき、後室道より御病氣故須賀川より還り、廣福山長
祿寺より御死去、御娘は天英公の御室となされ、秋田の御座あり、
其後御不縁に依て横手の御城に遣され、御女房達も御あり、付添へ
られ、須田義濃守が預け置れ、御知行を横手大澤村より二百石を附
け置れ、御名を昌壽院様と申奉り、大澤村の土面觀音の信仰
浅うらむをり、御参詣あり、まゝおのり大澤の内に布澤と申處あり、
をり出させられ、御慰めあり、天英様御對面、遊ばされ、御あり

江戸市上下のとき、市使者ありき、市金市小袖を度々進せしむ
しき、また鑑照様の市代き、梅津半右門殿と市使者き、市
金市小袖等進せしき、横手給人き須賀川よりきり、二階堂
譜代のものども晝夜市見舞奉公仕り、寛永十六年己卯八月八日
岩瀬市前市年五拾五市市逝去市法名、昌壽院殿光國正瑞大姉
市遺骸、天仙寺より須田義濃守横手総給人晝夜市番仕り市
葬式、市公儀より遊され市焼香、主計殿市趣のよりき、葦
名義晴公より市代官遣され故梅津半右門殿須田伯耆殿共
外役人あり、遣されて天仙寺川原き花井り奉りしき、また須
賀川市後室、寶珠院様の市姉き、會津盛隆公の市後室、大
市姉名二、盛隆公の市姉女き、各盛重公の市臺市国^替後角館へ

市越しりこ山と申ヌ市壁しりべあり云々と見えありありある事なり
五郎宮の旧地岩瀬前の古館は阿弥陀堂ありその山岩瀬の市方
の菩提を安置されりや近きところまである阿弥陀を唱ふ法師
守りこりとり

沼山櫻 沼山村あり年経くも塩釜櫻より古木り枯て今ハ
 その葉少て春ごと咲きぬ塩釜櫻ハ葉まで見事なるよしをもて
 濱で見えり意ふむざらへしとて已むてよき櫻とて岩瀬ノ中雪
 消ぬれハ此花咲を待たびて日毎ハ花の中使あり花咲かぬより
 くるを惜み永き春日を花の下に送り給ふぬぞハ大澤ノ真真
 ちちとて此寺南郡ハ名にち風の中なる吹ハ餘波あり散り
 行なふハみ葉櫻ハ青葉うつるまでめでたり給ひハ櫻とて子

後水尾院も此塩竈櫻をいかに好せ給ひて 浦の名を起こえ遠
きみちれくの花は軒端にちうれきなるまゝより製あり此沼山櫻の
嫩なりとて又うづらうれと枯行き折つぎなり木もれどもかく
生ひつゝ事ありこゝ山石瀬市前の惜の櫻と村氏の云ひあり

十二面社、神宮鈴木氏家譜

此神宮鈴木氏、古々旭國、神主家より分派し給ふ
上祖天啟
初、鈴木鑑太、重武、二代徳之進重実、三代鑑太、重昌、四
代徳之進重恒、五代當職神宮 鈴木部重勝、
十二面社を楯石の社とて人あり、初宮大澤の楯石の邊に楯ありと
いふ

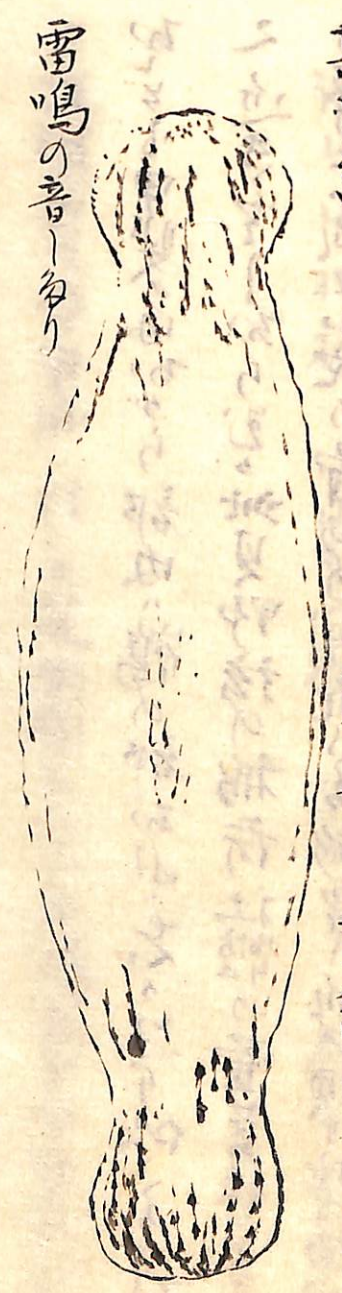
大澤邑十二面神寶

此石、いかに畠中へ降りし

雷杵、石重サ、二百四十泉零

其つぎ

其石、長サ凡二尺餘リ



雷鳴の音あり

といふ石の隅々、隙ありと云はれしれぬみとあり

石の隅々、事を記しりまゝ、朝鮮史記の高麗王、文宗のとき、黄
州へ墮る石あり、聲雷の如しと見えたり、まゝ、筆談に雷斧、雷
楔の事ありと見えり、按、石斧、雷楔、雷斧、雷杖、といふ石の
寶具、今、世々、金銀錢幣を通ふこと、用ゐる重寶ありあり
はらめまゝ、文殊菩薩の金剛杵も、此雷杵の事あらむ、楯あり

貝野弦山稻荷大明神祭日六月朔日 齋主 横手 佐土 富岡傳右衛門
 此貝野弦といふ山の名ぬしむ螺石かと仰けりまゝ山の峽より
 事なり峽の連峯をいづるまゝとて知れり人かこゝをいふ事
 事ながら富士の鶴芝山を駿河からじ甲斐の鶴といひあゝいひお
 なし甲斐の國なり甲府の人郡部の内へ行ふ郡へ行ふ
 また郡内の人甲州へ行ふと他郡の人うち戯きて甲斐の鶴へ行
 ると甲斐の鶴ながら郡内鶴の部ぬれまゝなり似るもの
 こ近きやうからむ此貝野弦の稻荷は駿河の富士山とて天井
 の板の上か板と小蛇の骨より削死する形なり板の頭と蛇の頭と打
 て死するあやうき事を傳へるものなりぬ

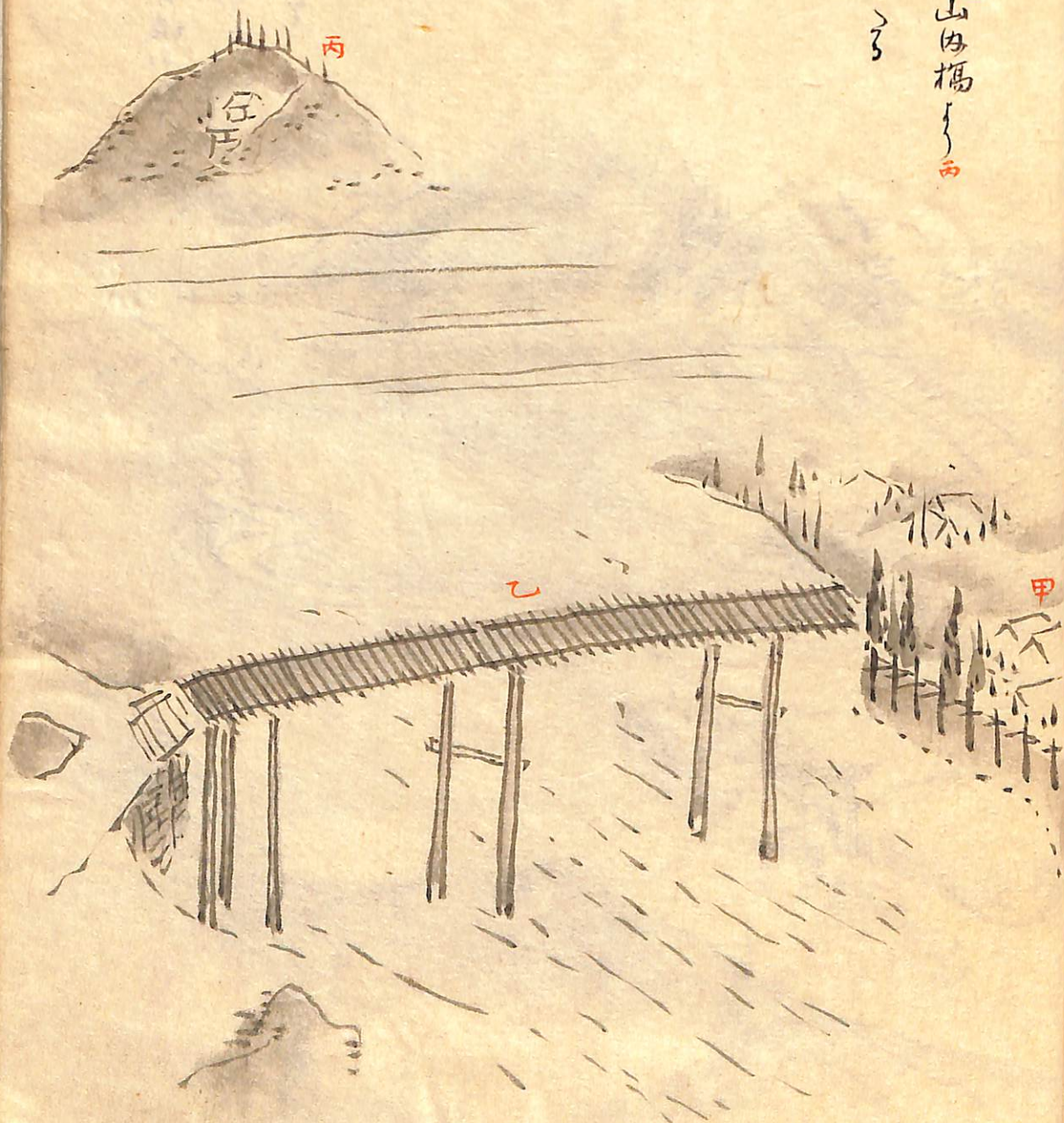
羽根山神明宮 羽根山邑の所 祭日七月廿日 齋主 庄三郎
 沼山神社 沼山村の所 祭日 齋主 小重郎

徳家負石戸 人数三百五十八人 馬三十八疋

雪吹をよみかけし
 まる

梢よりちり花もあゝ雪を大澤山風もあゝぬく

前作也。激。山内橋。西。



旭園、社の一鳥居ハ西の坂に在リ

丁三升寺ハ古河の上の
西村本塚の邊りの眺

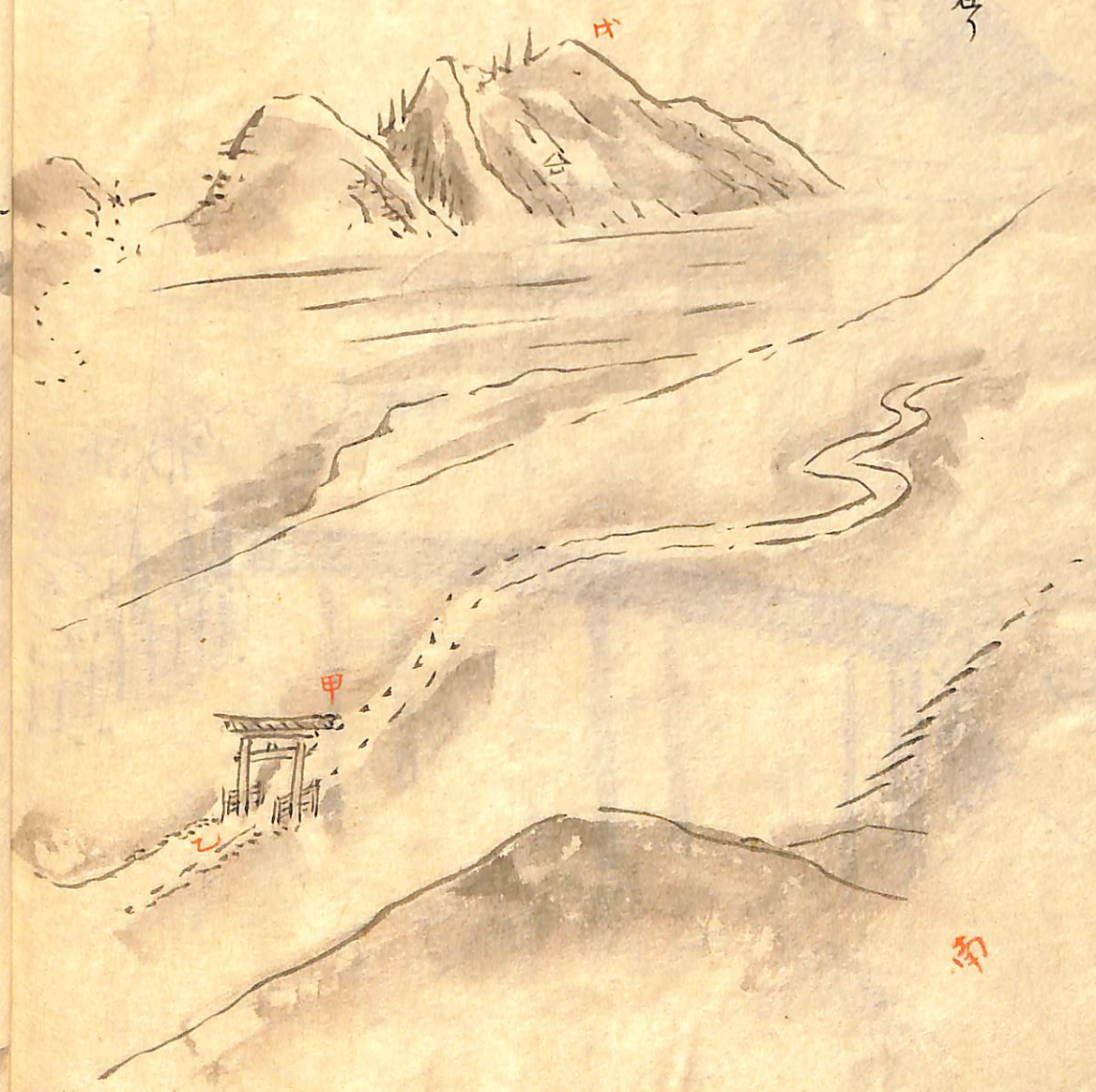
ホ十一面觀音山

己貝ノ蔓山嶺稻荷山

まきハ庚馬あまの嶽

いし通きハ本郷辛

ぞとやう



乙



水

庚

己

辛

乙

丁

丙

此藥師ノ三神と
 りりり本のごりりり
 ゐりり侍上雲度りりり
 りりりりりりりりりり
 ゐりり事ごりりりりり



旭園の七本杉の内、常と此天狗根と
 同く、奇品之常根ハ、まゝきの

天狗根

二天餘、枝葉、まゝ逆ハ
 して天狗の根の、まゝ
 まゝ、いひまゝ
 天狗宿
 まゝ

天狗宿
 まゝ古根の跡
 まゝ、此根、まゝ
 して天狗宿、まゝ
 まゝ、天狗宿、まゝ、根、まゝ
 まゝ、まゝ、まゝ、まゝ



